

CHAPTER=1

わたし、入野^{いりの}マナは、普通の女の子だ。

わたしは、もちろん生きているわけなので、実際に処刑された経験なんてない。でも、断頭台に向かう死刑囚の心境というのは、こういう感じなのかな、と思う。

こんな最悪なタイミングで、あることを思い出した。わたしは、あと一週間後には一四歳になるんだ。なんだったってそんな時に、首を刎^はねられなきやいけないんだろう。

保健室の中には、鼻腔をつく薬品の香りが漂い、ワックスをかけた直後のようにつるぴかの床は、蛍光灯の光を反射して輝いている。

人で溢れかえる室内。わたしたちのクラスとお隣のクラスの女子が全員、体育のジャージ姿で集合している。それらが並び、保健室をはみ出して廊下にまで続く長い列を連ねている。

ふと視線を向けた先に、大きな姿見が立っていた。

その中に映るのは、まるっとした黒い瞳に、輪郭を覆うようなショート黒髪。その身体は、中学二年生

にしては発育が悪くて、身長が低いだけじゃなく、胸の膨らみも控えめ。おまけに、小学生に間違えられてしまうほどの幼な顔だ。

そこに映るのはつまり、わたし自身の姿であって、伸びない身長に、膨らまない胸、ちっとも大人に近づかない身体のこととは今更調べるまでもなくわかっていく。だけど、そんなこととは関係なく、わたしはこの列に並ばなければいけないのだ。そして、見たくもない現実の数字を叩きつけられて、またも落ち込まないといけない。それって、わたしにとっては、処刑されるのとほとんど同じようなものだ。

そんなわけで、わたしは身体測定が大っ嫌いだった。「ねえ、また胸大きくなっただんじゃない？」

「そう？ 実はさー、揉むと大きくなるってテレビでやってて、こっそり家でやってたんだよね。あれ、効いたのかな」

「うっそ、そんなの本当に効果あるんだ」
そんな会話が飛んできて、それをわたしの耳は敏感に捉えた。

無駄な抵抗とわかりつつも、わたしの手はするすると自分の胸に伸びる。自らのささやか過ぎる膨らみに、

まるで面白くない漫才を見たときのようにニヒルな笑いが浮かんでしまう。

「今から揉んだって、ちょっと測定には間に合わないんじゃない？」

「わあっ！」

突然の声にはっとして前を向くと、保健の先生がわたしの顔を覗き込むように見ていた。

「入野さん、あなたの番なんだけれど」

先生は、身長測定器を指差していった。わたしは、えらく恥ずかしくなって、はい、と裏返る声で返事をして、そそくさと測定器に乗った。天板がひんやりと冷たく、思わず足指が内側に丸まる。

先生は、背が高くスレンダーで、大人の女性と呼ぶにふさわしい完成されたスタイルをしている。その容貌は、今のわたしに足りないものが揃っているようだ。「はい、じゃあ、かかとぴったりつけて。あ、背伸びはしないでね」

いくら背が低いからってそんなことしません！ という言葉が喉元まで出かけた。

カーソル部分が引き落とされて、わたしの頭頂部へ、少しずつ近づく。

実は、この測定のために、朝、髪をセットするとき、気持ち上のほうへポリリウムが出るようふんわり仕立てにしてきたのだけ——。

ぐしゃり。その思惑ごとまとめてぶっ潰すように、カーソルは公平に公正に正確に、わたしの頭へと到達した。

「一四五・五センチね」

すっぱ——ん。

ギロチンの刃が落ちて、わたしの首が飛ぶ。

見事なまで完璧に、死刑が執行された。

絶望的。全くもって、わたしの身長は伸びていなかったのだ。ただの一ミリすらも。

一年生のころの最後の測定から数ヶ月。成長期であるはずのわたしの身体は、残酷なまでに時を止めてしまっていた。

希望なんて持ちようのない、絶望ど真中、暗黒まみれの散々な結果だ。

しかし、わたしの落胆をよそに先生はその綺麗な手で、無慈悲にもさらさらと記録表へ数値を記入する。

「ち、ちよつと待っ……」

思わず懇願するような言葉が出た。

「何か？」

「いえ、何でも、ないです……」

沈んでいく声色で、返答した。

わかっていたとはいえ、いや、わかっていたからこそ、落ち込む。

だけど、わたしは下を向くことはしない。落ち込みはしても、へこたれはしない。

切り離された首を拾い上げて、くっつけ直してまた何ごともなかったかのように前を向き歩き出す。

女の子でいることは、きつとそれ自体が戦いなのだ。

× × ×

今日の空は、本当によく晴れていた。

爽快に広がる青空の中、トッピングのように浮かぶ控えめな白い雲。それらの心地よさは高い建物の立ち並ぶ街中でも十分に感じられて、まさに最高のお出かけ日和だった。それなのに今、わたしはひどく億劫な気分にいる。

「あ、あれあれ！ あれってほら、この写真と同じビ

ルじゃない!？」

わたしの先を足早に歩くスズカが、振り返っていった。焦げ茶色のショートヘアが、彼女の高揚を表すように躍って揺れる。手元には、雑誌から切り抜いた記事がある。そこに掲載されているのはひどいピンぼけ写真で、建物と建物の間の最上部を人影が飛び移っているようにかろうじて見える。そして、その欄外に『空飛ぶ! 怪奇少女!』という見出しがついている。「そうかなあ? なんか似たような建物、他にありそうだし……。第一、このぼけぼけ写真じゃ判断つかないって」

怪訝そうに首を傾げたのは、わたしと同じくスズカの後ろをついて歩いていたあおいちゃんだった。ビルの隙間から景気よく差している陽の光が彼女のお団子頭を照らして、甘い栗色の髪が、余計に明るく見えていた。

「よく見ろってば。ほら、窓の形と屋上の鉄塔の感じとか、同じでしょ?」

スズカは、記事と道路の向かい側にあるビルを交互に指差して、熱心に説明する。わたしとあおいちゃん は目を凝らしてみるけど、

「うーん、見えるような、見えないような……」
わたしは顔をしかめて首をひねった。

「いや、絶対間違いないよ。と、いうわけで、ここからは予定通り三手に分かれて周辺調査&聞き込みだ！」

「ええ〜！」

わたしとあおいちゃんがほとんど同時に声を上げた。
「文句いうんじゃないの！ 部の存続がかかってるんだから」

「別にこれをやらなくても、他のことでいいんじゃない……」

そのあおいちゃんの意見をぶった切るように、

「それじゃ二時間後に蟹江^{かにえ}西公園に集合、はい散った、散った！」

スズカは有無をいわさず、わたしたちは強制的に散開することになった。

そもそも、わたしたちは街中で一体なんでこんなことをしているのか。

その発端は、数時間前にさかのぼる。

校舎の階段を小気味よく上っていく。

ところどころでミシリ、と音を立てる古い木造建てを急ぎ足で歩き、三階西側、一番端っこからひとつ手前の小さな教室へ辿り着いた。

本来、教室名を記載する扉上のプレートには何の文字もなく、代わりに、扉に方眼紙がビニールテープで貼っつけてある。そこには極太のマジックで、『全部』、その下に『関係者以外、立ち入り禁止！』の文字がある。ここが、わたしの所属する『全部』の部室だ。

「あ、マナ」

錆びかけた蝶番の擦れる音とともに扉を押し開けるなり、室内から声が飛んだ。

お団子にまとめ上げた栗色の髪、目尻の少し下がった優しいな丸っこい目。太めな印象は全然ないのに出るところ出て、可愛らしさの中にはほのかに色気が同居する姿がそこにあった。

「あおいちゃん。あれ、スズカは？」

「今日は部長会議だった。でも、そろそろ来るんじゃないかな」

あおいちゃんは流し台でポットから急須にお湯を注いでいた。

「なーんだ、急いできたのに」

「週番の仕事でしょ？ 遅れるのは仕方ないじゃない」

「それでも、スズカはきつとうるさいでしょ？」

「ま、それもそうね」

肩をすくめて笑い合い、わたしは定位置の席へついた。

室内は数々の私物で雑多に彩られている。棚やラックの中には、雑誌や漫画、それにゲーム機等々。さらに壁にはポスターが貼ってあったりと、やりたい放題といった有様だ。

「はいマナ、お茶」

「ありがとう——」

机に置かれた湯のみをわたしが手に取った瞬間、山から下りた猪がぶつかつたような勢いで扉が開いた。わたしたちは、そんなふうにごこへ来る人間はひとりしかいないということを知りつつも、反射的に視線を向けた。

焦げ茶色のショートヘアと、運動部でもないのにやけに引き締まった体を、息を切らした様子で揺らす、予想通りの人物がそこへ立っていた。

「スズカ、どうしたの、えらく暗い顔して」

あおいちゃんの問いかけに、スズカは一呼吸置いて

から、顔を上げた。

「会議！ 緊急会議だ！」

そういったスズカの口調には、あからさまに苛立ちが込められていた。そのただならぬ様子に、わたしとあおいちゃんは顔を見合わせた。

「何かあったの？」

二人分をまとめて、あおいちゃんが尋ねる。

「危機だよ、『全部』消滅の！」

部室内において、もつとも権威ある部長席に怒気のコもる足取りで移動し、スズカはどっかりと腰を下ろした。

話を要約しよう。

わたしたちの私立柄崎がらひざ中学校は、県内でも屈指の規模を誇るマンモス校だ。全校で一二〇〇人以上生徒がいるらしい。そのため、部活動の数も多く、内容も多岐に渡る。

生徒の自主性を重んじる、という学校の教育方針もあって、新しい部を作ろうと思ったら、最低部員数三人という条件さえクリアすれば、活動内容がどうであれ、とりあえず認可されるようになっていたのだそうだ。

だけど今日の部長会議で、増えすぎた部活動を整理していくことが決定したらしい。

無数にある部活動の中には、活動内容が不明だったり、あるいは名前が違うだけで中身はほぼ同じものであったり、活動そのものがほとんどない幽霊部も存在している。

そういった要検討対象の部には、每学期末に活動報告書を提出することが義務づけられ、これをもとに部の廃止や併合、部費の調整などが行われることになったのだ。

で、わたしたちの所属する全部は、真っ先に要検討対象となったというわけで。

「ちくしょー、まるで、あたしたちをピンポイントで狙ってるみたいじゃん！　こんなの弾圧だよ、自由の抑圧だ！」

スズカはぷりぷりと怒りを振りまき、不満を漏らした。

「どちらかというと、そうなるほうが当たり前だと思うんだけど……」

苦笑いしつつ、あおいちゃんがいう。わたしも同感だった。

部長沢渡スズカ、副部長早見あおい、それとわたしで構成されるこの部は、本当に活動実体がない。全部という名前は、『何でもありな部』という意味らしく、そもそもから目的がわからなかった。わたしたちが中学に入ったころは部員もいなくて、廃部が決定していたところを、スズカが強引にわたしとあおいちゃんを引き入れて存続させてしまったのだ。だから、この部の先輩がどんな人たちかも、どんなことをしていたのかも全く知らない。

スズカは、誰もいない部に入ることによって一年生にして部長の座についた。それ以降というものの、部を根城とし、私物を持ち込みまくり、年間三〇〇〇円の部費は茶菓子代や書籍代に消えていくという不届きぶり。だから、今回の決定は当たり前前というか、むしろ今まで廃部にならなかつた理由がわからないくらいだ。基本的には何もせず、ただ部室でうだうだしているだけなのに、部活動として成立していること自体が変な状態なのだ。

「何言ってるのよ！ このままじゃ、廃部になるか、倶楽部に吸収されるかなのよ！ あんな、本当に遊んでいるだけのクソ部に……」

「ちょっと、ここ木造だから、聞こえちゃうから……！」

あおいちゃんが壁面を気にしながらいった。壁一枚隔てたお隣の部屋が、娯楽部の部室なのだ。

スズカいわく、娯楽部は、『カードとビデオゲームとペプシコーラを愛する人間オタクのたまり場』で、実際の活動内容がよくわからないという点では、全部と大して変わらない。だけど、部員数がわたしたちの倍以上、七人もいるため、もしも併合されてしまうなら、全部が吸収される形になってしまう。スズカとしては、それはどうしても嫌なのだ。あまり娯楽部の人たちを好いてないみたいだし、何より、自分の好き勝手できる部ではなくなってしまうから。

「でも、そうはいつでも、わたしたちが何の活動もしてないっていうのはほぼ事実じゃん」

わたしがそういうと、スズカは力強く立ち上がった。「だから無理矢理作るの。『活動内容』を！」

得意げにいい放って、自分のカバンをまさぐり一冊の雑誌を取り出した。

それは『ブルーブック』という、音楽や映画やファッションや、あらゆるものを闇鍋みたいにごった

煮にしたような雑誌だ。わたしも何度か開いたことがあるけど、その度に全然内容が違って、正直何の雑誌なのかよくわからなかった。

そして、スズカの取り出したその表紙には『心霊／オカルト特集』と銘打たれている。

わたしはその見出しだけで、きつとこれからろくでもないことに付き合わされるんだろうと悟った。

「ここ、見て」

スズカは、雑誌をばらばらとめくり、あるページを大きく開いて見せた。

ひどいピンぼけ写真と、その欄外に『空飛ぶ！ 怪奇少女！』といういかにも嘘くさい見出しがついている。そして、『撮影地／宇田川市街』うだがわとも。

「スズカ、まさかとは思うけど……」

嫌な予感を押し殺すような顔で、あおいちゃんが訊く。

「こいつを探しにいきます！」

自信満々な様子でスズカがいった。わたしは思わず気が遠のいてしまいそうになる。

「や、やめようよ……」

「いいや、行く」

わたしの懇願にも、スズカは頑として首を振った。

「見つかるわけないよ、ていうか、いるわけないし」

「あおい、いるかどうかは大した問題じゃないんだよ」

そういうながらスズカはハサミを手に取り、雑誌の記事を切り抜きはじめる。

「要はね、探したという事実さえあれば問題ないの。」

そういうのを積み重ねて、無理矢理にでも報告書を作り上げちゃうのよ」

「でも、それじゃオカルト研究部と同じじゃない？

内容が同じ部は併合されちゃうんでしょ」

「やつらは研究部などと名乗っているけど、部室の中で話をしてるだけで、実際に足を使つての『調査』なんてしていない。そこで差をつけてやるわけよ。要は、倶楽部ともオカルト研とも違うっていうところを見せることができるばいいの」

あおいちゃんの問いかけに答えながらも、スズカは手際よくきれいに記事を切り抜き終えた。意外に手先が器用なところがあるのだ。

「それじゃ、行こうか」

「ええっ？ 今から行くの!？」

「なんだよマナ、知らないの？ 昔の人は『善はいそ

げ』っていったんだよ」

これは確実に善ではないと思うんだけど。

「でも、まあ、ちよつと行って適当に散策して帰るだけだもんね？　こんなの、本当にいるわけないもんね？」

あおいちゃんは、念を押すように確認する。その気持ちはよくわかった。スズカが適当な気持ちであるならまだしも、〃本気〃だったとしたら、より面倒なことになるからだ。

「あおい、大丈夫。心配するな」

スズカは意味ありげに目を閉じ、あおいちゃんの肩に手をおいた。

「『怪奇少女』は絶対に存在する！」

力強く見開かれた目は眩しいばかりに輝いて、スズカの〃本気〃を宿していた。それは、併合の危機にうるたえるというより、わたしたちを引っぱり回す口実ができたことを喜んでいるようにすら見える、無邪気な目だった。

「やっぱり」「そうなるの……」

わたしとあおいちゃんは、同時にがっくりと肩を落した。

そして、今。

「いるわけないじゃん、こんなの……」

スズカに渡された記事のコピーを手に、ため息混じりに天を仰いだ。

まだ約束した時間の一〇分ほど前だけど、わたしはすでに待ち合わせ場所の公園にいる。

一応ことわっておくと、『調査』をサボったわけじゃない。恥をしのいで、周辺のお店や近所に住んでいる人たちに聞いて回ったりはしたのだけど（尋ねる時の恥ずかしさは、思い出したくない……）、当然というべきか、手がかかりらしき話は何も得られなかった。それで、今は公園にあるカバの遊具の上に座り込んで二人を待っているのだった。

この公園は、人通りの多い通りから少し離れた場所、街中にしてはとても静かな場所だった。今も、小さな子どもが集まって遊んでいて、その近くで母親らしき人たちがおしゃべりに夢中になっているだけで、その他に騒がしい音はほとんどない。

その様子を見ていて、ふとおかしなことを考えはじめた。あそこでサッカーをしている小さな子どもたち

と、その親たちは、お互いに昔そうだった姿とこれからそうなる姿で、いつかはあの子どもたちも、あんな親の姿になる。その間にある期間のどこかで大人になるのだろうけど、大人になったためしのないわたしには、いつごろがその時期なのか、さっぱりわからなかった。

わたしにとってのそれは、お酒を飲めるようになったらとか、運転免許を取れるようになったらということではなくて、女の子から大人の女性になる瞬間は、一体いつ訪れるのかということ。少なくとも、今はちっとも大人に近づいている気がしない。胸だって膨らまないし、背だって伸びやしない。実感なんて、何もないのだから。

女の子であるのは、特殊なことだとわたしは思う。子どもから大人になる間のどこかに、大人でも子どもでもない、『女の子』というすごく特殊な期間があるのだ。

そこで生きていくのは案外過酷で、その戦いに生き残った女の子だけが、大人になれる。

女の子でいることは、きつとそれ自体が戦いなのだ。仰ぎ見るように顔を上げると、遠く上空に小さく飛

行機が見えた。透き通るような青の中に、しゅーと一筋、飛行機雲を作っていく。

あんな風に、マッハで空とか飛びたいなああと、わりとまじめに思う。そんなことができるなら、きつと女の子の戦いなんてちっぽけなものに思えるだろうから。だけど、そうなれないことがわかっていいるからこそ、わたしはどうしようもなく女の子なのだ。空を飛ぶことを諦め、地面を歩いて、いつか来る大人になる時を目指していくのだ。それこそがわたしの羽になってくれるような気がするから。

戦っていくしかないなあ。飛行機雲を見上げながら、ぼんやりと思った。

と――。

ゆっくりと下ろした目線の先で、わたしはふと目を奪われた。マンションの屋上、落下防止用フェンスの外側へ立つ人影が見えたのだ。目を凝らしても、光の加減で少し見えづらい。でも曖昧に映るそのシルエットは、女の子のように見えた。

不意に、近くで車のクラクションが鳴った。反射的に振り返り、わたしはまたマンションを見上げた。すると、もうあの影はいなくなっていた。やっぱり、た

だの勘違いか見間違いだっただろうか。

「待ってー」

公園で遊んでいた子どもの誰かが蹴ったサッカーボールがてんでんと転がっていき、それを小さな男の子が走って追いかけて、わたしの横をすり抜けて行った。わたしは、子どもの走る先を何気なく目で追った。

ボールは道路の向こう側まで転がっていき、誰かの足下に当たった。

わたしは、息を飲んだ。足下に転がったボールを拾い上げた女の子。それは、わたしが見たシルエットと瓜二つだったのだ。

マンシヨンの上で目にしてから、数十秒と経っていない。普通に考えれば、ここまで移動できるはずがないのだ。それでも、同じ人にしか見えなかった。

女の子も、自分を見つめる視線に気付き、目が合った。白い肌に、色の薄い滑らかな髪。外国の人形のように可憐な、大人っぽい女の子。微かに笑ったように見えて、ほんの一瞬、時間が止まったように思えた。

車のクラクションが鳴った。夢から覚めるようにわたしは、その方向を見た。

車は公園前の道路へ向かっている。男の子は、それ

に気付かない。路上駐車が多く、車からも男の子は死角になっっているはず――。

起こりうる悲劇を頭に思い浮かべるよりも少し早く、わたしは駆け出した。

「止まって！」

出る限り大きな声で叫んだ。男の子か、車に向けたものかはわからない。その声に反応して、男の子が、立ち止まった。道路のど真ん中で。

足が千切れる勢いで走るけど、普通の女の子のわたしでは、絶対に間に合わない距離がそこにあった。

車のクラクションが鳴った。マッハで動けたら、と思う。

そしてわたしは、車と男の子が交差するその瞬間、思わず目を閉じてしまった。

耳を覆いたくなるブレーキ音が、つんざくように響く。

けれども、衝突音はしなかった。

わたしは、恐る恐る固く閉じた目を開ける。

「……あれ？」

何が起こったのかさっぱりわからなかった。ただ、車と衝突するはずの子どもは全くの無傷で、さっきま

で道路の向かいにいたはずの女の子と一緒に、わたしのすぐ目の前にいた。

「おいおい、男なんだからしっかりしなよ」

彼女は男の子と同じ目線まで屈んで、頭を撫でながら快活に笑いかける。ボールを抱えながらぼかんとする男の子は、何が起きたかよくわからないという表情で、それはわたしも同じ気分だった。

「あ、ねえ、あなた」

「え、わたし、ですか？」

わたしは、戸惑いながら返答する。彼女は、見た目の上品さに似合わないくだけた口調だった。

「ちよつとごめん、コイツ頼むわ」

「え、頼むって……」

「あんたが助けたってことにしといてよ」

「ど、どうしてですか？」

「あたしは、街の光を浴びちゃいけない人間だから」

「それって、どういう——」

いいかけのところで、彼女は人差し指をわたしの唇にあてがい、

「いずれね」

そう、含むように微笑んでいった。

「コウタ！」

叫び声が響いて振り返ると、血相を変えた女の人が駆け寄ってきた。多分それはこの子の母親で、気付いた男の子もその人目がけ走っていく。二人が抱き合う姿を見て、わたしも胸を撫で下ろした。

「あなたが助けてくださったんですよね？　ありがとうございます、本当にありがとうございます！」

わたしに向け母親が深々と頭を下げるので、わたしは慌てて、

「あ、いえ、それはわたしじゃなくて、その子が」

「……どの子？」

「だから、そこにいる……」

わたしは女の子のほうへ振り返る。

「——あれ？」

そこにいるはずの彼女の姿はどこにもなかった。

辺りを見回してみても全く見当たらず、魔法を使ってみたにすっかりと消えてしまっていたのだ。

「マナ！」

聞き慣れた声が入り、たった今、大惨事を寸でこのところで免れた道路の方角から公園に入る人影が二つ、目に飛び込んだ。

「スズカ、あおいちゃん！」

歩み寄ってくる二人は、次第に状況が何か変だということに気付いたのか、みるみる顔色が変わっていった。

「マナ、何これ、どういう状況？ 何かあったの？」

スズカは、周りの様子をひとしきり見回しながらいった。

「うん、あの、ちよつと……ねえ、来るときに女の子見なかった？」

「え、女の子？」

「そう、髪の色が薄くて、人形みたいにきれいな子。すれ違わなかった？」

「あたしは、気付かなかったけど……あおい、見た？」

「ううん、わたしも見てないよ」

「そう……」

誰にもその姿を見られることなく、こつ然と消えてしまった女の子。彼女はもしかして、本当に魔法でも使ったんだらうか。

あのマンションに視線を向けた。当然のように人影はなく、ただその上空に、途切れた飛行機雲が伸びているだけだった。

